



たい肥の役割



たい肥を入れることによって、土壌の物理性（排水、通気、保水性等）や、化学性（保肥力、pH、微量元素等）の改善だけでなく、たい肥中の肥料成分が化学肥料の代替にも利用できます。

たい肥に含まれる肥料成分は化学肥料と異なり、すぐに作物が吸収できる形態のものと微生物によって分解されてから効果が現れるものが混在しており、その割合や分解されやすさはたい肥の種類によって差があります。牛糞たい肥の場合、施用後1年以内に有効となる量は、窒素が30%、リン酸が60%、カリが90%程度といわれており、それ以外の部分は翌年以降に徐々に効いてきます。従って、たい肥を入れ続けると土壌に肥料分が蓄積し、肥料の施用量を減らさないと養分過多になる恐れがあります。

主なたい肥の種類別特徴と使用方法

種類	特徴と使用方法
牛糞 たい肥	<p>【特徴】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・乳用牛の牛糞は、和牛のそれより肥料成分がやや高いです。 ・基肥として使用すると良いです。 ・野菜畑への施用量は、基肥として2t/10aぐらいとし、作目や作型を勘案して加減します。 <p>【留意点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・肥効が穏やかなので、土づくり資材として1ヶ月前に施用します。 ・発酵が不十分であると、飼料に含まれていた雑草種子が発芽するので完熟堆肥を選びましょう。
鶏糞 たい肥 (発酵 鶏糞)	<p>【特徴】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鶏糞堆肥に含まれる肥料成分は、牛糞堆肥に比べるとかなり高く特にリン酸が多く含まれます。 ・野菜畑への施用量は、500kg/10aぐらいとし、作目や作型を勘案して加減します。 ・肥料成分が多く、肥効の発現も早いので、堆肥というより化学肥料に近い使い方をします。 <p>【留意点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・粗大有機物は、ほとんど含まれていないので、物理性の改善効果は余り期待できません。 ・施用量が多すぎると肥料あたりの恐れがあります。
乾燥 鶏糞	<p>【特徴】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発酵による窒素成分の揮散がないため、鶏糞たい肥より更に多くの肥料分を含みます。 ・土壌中では急激に分解し、ガスや植物の根に害を及ぼす物質が発生しやすいので、土壌と十分に混和し施用してから作物の作付けまでに1ヶ月ぐらいの期間をおきます。 <p>【留意点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・施用量が多すぎると肥料あたりの恐れがあります。
豚糞 たい肥	<p>【特徴】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・肥料成分は、牛糞たい肥より高く、鶏糞よりはやや低いものが多いです。 ・比較的分解しやすく、有機質肥料に近い肥効が期待できます。 ・畑地への施用量は、300~500kg/10aぐらいとし作目や作型を勘案して加減します。 <p>【留意点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・施用量が多すぎると肥料あたりの恐れがあります。
木質入 家畜糞 たい肥	<p>【特徴】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・肥料成分の量や効果の発現は、バーク等の木質物の混合割合と家畜糞の種類によって大きく異なります。 ・完熟堆肥であれば、肥料としての効果や土壌改良効果が期待でき、あらゆる作物に安心して使えます。 <p>【留意点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・堆積発酵期間が少ないものは、自家で少なくとも3ヶ月以上熟成させてから施用することが望ましいです。 ・木質家畜糞たい肥を多量に続けて施用する場合は、土壌に肥料分が蓄積しやすいので、化学肥料の施用量を減らします。
鶏糞 焼却灰	<p>【特徴】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・焼却しているので、窒素成分はほとんど含まれていません。リン及びカリ質肥料として施用します。 ・灰分が多く含まれるため、アルカリ性を示します。

家畜の種類、副資材の種類及び処理方法により資材の特性が異なります。家畜糞のたい肥等を利用する場合には、それぞれの特性を把握した上で、個々の資材の肥料成分を参考にして使用します。